

博士論文の要約

氏名 篠崎 敦史

論文題目 「平安時代の国際関係と外交の研究

—古代から中世移行期における東アジアとの交流の歴史的意義—

本論文は 10～12 世紀の日本が東アジア諸国とどのように交流し、それがいかなる歴史的意義を有したのか、外交を軸にして考察を行ったものである。

これまでの研究において、10 世紀以降の日本の対外関係は政治から経済を軸とするものに変化するとされてきた。この指摘は 1948 年発表の森克己『日宋貿易の研究』（国立書院）においてなされ、以後の研究は交易を中心に進み、政治的な外交に関してはほとんど検討が行われなかったという状況が続いた。一方、この理解への疑問は 1980 年代に入ってから本格的に提起されるようになり、現在では、日本を含む当該期の東アジアにおいて、王権が交易や宗教交流などに関与していたことが議論の前提として共有されるようになっている。しかしこれらの研究も従来の通説であった森克己説が重視した日宋貿易像の克服という文脈でなされたものであったため、国家間の外交を正面から取り扱っていないという問題点をはらんでいた。

本論文はこのような研究状況をふまえ、従来手薄であった 10～12 世紀の日本朝廷と諸外国との政治的な外交交渉に焦点をあて、その実像に迫り、歴史的意義を明らかにすることを目的とした。

上記の目的を達成するため、本論文は 3 部構成をとった。

第 1 部「渤海の滅亡と日本」では、8 世紀以来、日本と関係を持った渤海の滅亡の歴史的意義を考察した。

第 1 章「日本古代の外交と公使宴会儀礼」では、渤海使などに実施された外交儀礼の意義とその消失について分析した。その結果、日本古代の外交儀礼は、天皇の徳が海外にも及んでいることを国内の官人層にもみせつける意図があることを明らかにし、渤海の滅亡はこのような儀礼の終焉を意味したものであったとの評価を行った。

第 2 章「東丹国使について」では、渤海滅亡後、その故地に設置された東丹国と日本との交渉の意義について検討した。その結果、延長 7 年(929)の東丹国使の来朝は、当時、帝位継承争いをしてきた契丹内部の東丹王の派遣によるものであり、当該事件は 10 世紀前半の日本が契丹の権力争いに巻き込まれかけていたものであったことを明らかにした。

第 2 部「高麗との対外関係の諸相」では、10 世紀前半から 11 世紀にかけての日本と高麗の外交関係について検討を加えた。

第 1 章「刀伊の襲来からみた日本と高麗の関係」では、10～11 世紀前半の日麗関係を考察した。寛仁 3 年(1019)の刀伊の襲来の際、賊に拉致された日本人を高麗が送り返してきたことが同国の「友好的」姿勢を示すものとされてきたこれまでの評価について、前後の史料をみるとそのように位置づけることは困難で、当該期の両国は互いに密接な関係を持

つつもりはなく、何か問題が起きた時にのみ交渉が行われるものであったとした。

第2章「高麗王文宗の医師要請事件と日本」では、承暦3年から永保元年(1079～81)に起きた医師要請事件について分析を加え、ここから11世紀後半の日麗関係を考察した。検討を通じて、高麗の対日外交が宋、契丹などの影響を受けながら展開していることを明らかにした。また、外交文書の分析から、高麗は自国と日本を対等な関係とみていたが、日本は高麗を下に位置づけるなど、“ズレ”があったことも論証した。

補論「高麗における医療の機能について」では、前章の理解を深めるため、高麗にとって、医療がどのような意味を有していたのかについて素描した。その結果、高麗では王の徳を示す役割を医学が担う場合があり、前章で検討した事件はこのような関心から、高麗が日本に蓄積された中国医学知識の入手も企図していた可能性があるとの推定を行った。

第3部「宋との対外関係の諸相」では、10世紀後半から12世紀の日本と宋の関係について俯瞰し、これとあわせて、日本の出入国管理体制、また巡礼僧の外交関与の消長などを中心に論じた。

第1章「平安時代の渡海制と成尋の“密航”」では、延久4年(1072)に中国に渡った成尋について、その渡航形態を“密航”とする説を再検討した。これを通じて、成尋を“密航”と断定できるだけの史料根拠がなく、むしろ許可を得て出国した可能性が高いことを論じた。また、平安時代の日本は密出国はある程度可能な一方、国家に把握されずに帰国することは困難であるという特質も浮き彫りにした。

第2章「10～11世紀の日宋交渉と渡海僧」では、延久4年の成尋出国を契機にして発生した、2度の日宋交渉について考察した。その過程で、11世紀後半の朝廷が遣唐使の外交の先例を参照している可能性が高く、遣唐使の時代とそれ以後を連続面として把握する必要のあることを指摘した。また、成尋渡宋を契機に2度の日宋交渉が発生したため、以後、朝廷は僧の中国出国を忌避するようになったとの見通しも示した。

第3章「平清盛の対宋外交の歴史的 position」では、承安2年から4年(1172～74)に発生した平清盛と宋の交渉と、それが後世の鎌倉幕府、室町幕府などにどのような影響を与えたのかについて検討を加えた。その結果、清盛の宋との外交は、事実上、最後の日宋交渉で、さらには10世紀以来、日中交渉を媒介していた僧の外交機能が低下する転換点に位置していることを明らかにした。また、鎌倉幕府や室町幕府が清盛の先例を重視していた形跡もほとんどなく、清盛の事例を“武家外交”の先蹤と位置づけることへの疑問を提示した。

終章ではこれらの検討で得られた成果をもとに、下記の2点を指摘した。

1つ目は、10～12世紀の日本で外交に属する事柄の発生頻度が低かったことの評価についてである。この問題は、朝廷が外国政府との政治的な交流に消極的であったことのみならず、外部の宋、高麗も日本と密接な関係を持つとする意思が希薄であったことも大きく関係する。さらに、当時の東アジアにおいて日本は外交上、重要な位置にはいなかった。そのため、当該期の日本が東アジアの政治的関係から距離を置いているという事実は、平安貴族たちの外部への姿勢のみならず、外的な要因も影響した事柄であったと位置づけられる。

もう1つは、11世紀後半頃から長期間、それ以前よりも宋、高麗との関係が疎遠になっていく時期が存在するという点である。11世紀後半から少なくとも約80年程度、中国との外交を媒介していた巡礼僧の出国がなくなるとともに、朝鮮半島の高麗との交渉も確認

が出来なくなる。いずれも 11 世紀後半に発生した両国との外交交渉に関係して、朝廷が行った対応の結果である可能性が高い。そして、この後にあらわれる 12 世紀後半以降の外交は、それ以前との繋がりが希薄で「閉鎖的」なものであった。そのため、12 世紀以降の外交はそれ以前の延長線上に位置づけてよいものではなく、そのような断絶が生まれたという意味で、11 世紀後半の朝廷の対応が後世に決定的な影響を与えたと評価することが出来る。

以上の外交を軸にした考察によって、10～12 世紀の対外交流に平安京の天皇・貴族層が強い影響力を持っていたことを明らかにするとともに、従来、低く評価されてきた朝廷の外交の歴史的な意義について、その全体像と後世に与えた影響を鮮明にすることが出来た。